琉球大学学術リポジトリ

Clinical characteristics of hidradenitis
suppurativa patients in Okinawa, Japan :
Differences between East Asia and Western
countries

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学 公開日: 2021-11-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Omine, Takuya, 大嶺, 卓也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/49989

(別紙様式第3号)

論 文 要 旨

論 文 題 目

Clinical characteristics of hidradenitis suppurativa patients in Okinawa, Japan:
Differences between East Asia and Western countries

(沖縄における化膿性汗腺炎患者の疫学的特徴: アジアと欧米での疫学的相違)

氏 名 大嶺卓也 (大嶺)
(直 筆)

背景：化膿性汗腺炎(Hidradenitis Suppurativa: HS)は、腋窩や鼠径部、臀部などの終毛性毛包の炎症から熱感・疼痛を伴う紅斑や結節を生じ、皮下硬結や瘻孔を多発し線維化の強い瘢痕を形成する慢性炎症性の皮膚疾患である。従来、慢性の皮膚感染症と考えられてきたが、現在では自己炎症性疾患と考えられるに至った。多くは思春期以降に発症し慢性に経過し醜形を残すため、生涯にわたり患者のQOLを著しく損なう。欧米諸国における有病率は一般人口の0.1~1%と推定されており、男性よりも女性の罹患率が高い。日本においては欧米と比較し有病率が低く大規模な疫学的研究は実施されていない。一方、日本の最南端に位置する沖縄県では、他の地域に比べて化膿性汗腺炎の有病率が高い。本研究の目的は、沖縄県における患者の特徴を明らかにし、東アジアと欧米諸国の違いを明らかにすることである。

方法：本研究は単施設での症例集積研究である。2010年4月から2019年3月までに琉球大学医学部附属病院で診断された全58例の化膿性汗腺炎患者のデータを収集し、日本、韓国、フランス、米国の先行研究と比較した。

結果：58例の内訳は男性42例、女性16例で、患者の年齢は15~76歳で、罹患期間の中央値は8.5年であった。患者の喫煙率とBMIは日本人および沖縄の平均よりも高かった。多変量解析では、罹病期間が疾患の重症度と関連していた。血清CRPと重症度間には強い正の相関があり($r=0.75$, $P<0.001$)、血清アルブミン値と重症度の間には逆相関があった($r=-0.67$, $P<0.001$)。全体的に東アジアではHSは男性に多く、家族歴のある患者は少なく(1.7% vs 29.1%, $p<0.001$)、欧米諸国に比べて重症のHurley stageⅢの患者が多かった(13.0% vs 3.1%, $p<0.001$)。東アジアでは炎症性腸疾患や脊椎関節症との併存はまれであった。欧米諸国では肥満が多く、喫煙率は東アジア諸国に比べて高かった。

結論：沖縄における化膿性汗腺炎患者の疫学的特徴が明らかになった。さらに本研究は、東アジアと欧米における患者層の違いを理解するのに役立つと考えられる。